

21世紀協会

2003年度 事業完了報告書

目次

| | |
|--------------------------|---|
| 全体の評価..... | 2 |
| 今期の主なトピック | 3 |
| 各事業..... | 5 |
| 1 就学支援事業..... | 5 |
| 1-1 就学支援事業..... | 5 |
| 1-2 識字教育事業..... | 5 |
| 2 マンニャン村コミュニティー開発事業..... | 6 |
| 2-1 農業指導..... | 6 |
| 2-2 衛生環境整備事業..... | 7 |
| 3 マンニャン人間開発センター | 7 |
| 3-1 センターの建設..... | 7 |
| 3-2 職業訓練..... | 8 |

全体の評価

先の1月末、地元サントクルス郡当局と共催で、合鴨農法についてのセミナーが開催された。講師には岡山大学から岸田農学博士を招聘し、この伝統的農法への大きな期待を膨らませて幕を閉じた。セミナー準備を含むデモ・ファームでの実験結果も上々で、今後のさらなる研究と普及への模索が課題となっている。この事業は、受益者を広くサントクルス一般住民としたこと、持続的または有機農業を推進するというアドボカシーの要素を含んでいる点で、協会としてははじめての試みといえる。これまで受益者は少数民族マンニャンに限られてきたが、「人間の安全保障」、「自然環境の保全」、「食の安全」といった課題に取り組むためには、今後ますます地域社会全体を巻き込む活動が必要となってくるだろう。また、中長期計画を元にパイロット事業地を拡大し、アムナイ川流域広範にわたって事業（識字教育、農業指導）を進める方針を立て、その調査あるいは部分的事業開始を行った。

以上の二点は、協会事業がこれまでの点的活動から線的面的に、あるいは水平垂直に拡大しつつあることを示唆するものである。その背景として、協会の地域での10年以上に渡る活動の成果や、地元住民との間に築かれた“信頼”をもとに、地域での援助要請、ニーズが拡大していること、またそのニーズに応えるための技術的人的リソースが充実しつつあることがあげられる。2004年3月末現在高等教育（大学、専門学校）を終了した者は6名を数え、1999年に発足した元奨学生を対象にした職業訓練を兼ねたボランティア・スタッフ制度も年々充実し、現在11名が協会事業を通して何らかの形でマンニャン社会にサービスを提供している。また、2000年度に開始した日本人インターン制度も4年目第二期生3名を迎え、各自の研究課題に取り組みながらも農業、医療、奨学生指導等といった分野で大きな戦力として貢献、サービスに厚みを加えた。

一方事業が拡大し、サービスの質が向上している反面、資金繰りがますます困難になっていることは深刻である。10年以上にわたり資金源の一つであった「ボランティア貯金基金」からの助成金も昨年度をもって終了しており、長期的経営の安定のためには寄付金や会費の増収のみならず、さまざまな創意工夫が必至となっている。

今期の主なトピック

➤ 合鴨農法

岡山大学から岸田芳朗先生を招聘してのセミナーは、有機農業にほとんど無縁なサントクルス地域に、“新しい農業のあり方”を提示した点で非常に有意義であった。セミナー開催中は、サントクルスのほぼ全ての balan ガイから参加者を数え、予想を上回る反響を得られたことは、今後地域社会全体に持続的農業を普及する足掛かりとなるだろう。また、本セミナーに先駆けての各種準備は約半年にも及び、その間現地スタッフの間で勉強会、各種研究が行われ大きな成果を得られたことは、現地スタッフ一同の大きな自信となった。3 月末現在、デモ・ファームでは合鴨米の収穫を目前にしているが、ほぼ順調な経過を得ている。また、セミナー参加者を中心に、「勉強会（仮称合鴨クラブ）」立ち上げの要請、同意を得ており、グループを中心に合鴨農法のさらなる研究が継続されることが期待されている。

➤ 女子職業訓練の開始

これまで男子元奨学生を中心に、農業、溶接、漁船操業等の職業訓練を行ってきたが、今期はじめて女子を対象にした訓練を開講、6 名の女子訓練生が「洋裁及び製菓作り」について学んだ。約一年に及ぶ訓練により、

- ✓ 短パン、スカートをはじめとする普段着の製作
- ✓ パンや菓子の製作
- ✓ 調理技術の向上と毎日の奨学生の献立への改善
- ✓ 成果物の一部販売

といった成果が得られ、一般にハイスクール時代学力の低かった訓練生であるが、「手に職」を、といった訓練には予想以上に興味を示し、上達も早く今後訓練科目のますますの充実が望まれる。

➤ 日本人インターン・シップの充実

日本人ボランティアによるインターン・シップも 4 年目を迎え、今期は第二期生 3 名（男子 2 名、女子 1 名）が現地入りした。活動内容は多岐にわたっており、協会の中心事業にもますます深く関与するに至る。

主な活動内容

| | 内容 | 担当 |
|-----------------|---|--------|
| 合鴨農法 | 岸田農学博士によるセミナーに先駆けて各種実験準備、役場担当者との調整など総合コーディネータとして活躍。 | 瀧村沙織 |
| 医療サービス | 前インターン生国金を引き継ぎ、医療サービスを担当。地元の病院や医療施設と緊密な関係を作りながら、多くの患者を救った。特に結核対策の雛形作成に貢献。 | 佐賀弘 |
| マンニャン語 単語帳制作 | 事業地のパラ・ティーチャー(非公式準教師)を協力しながら、マンニャン族の日常を語る絵本の制作や簡単な単語帳作りを行った。 | 渡辺隆之 |
| 奨学生の指導 | 寮生活をする奨学生の毎日の指導、管理は最も大変な業務である。食事を含む日々の生活必需品の供給から学習指導、また、学校当局との緊密な連絡などをよくこなした。 | 前記 3 名 |

➤ 事業地の拡大

95 年度にシプヨ村で識字教育を開始した当時は、教育に対する住民の意識が極めて低く、事業の理解を勝ち取るのに大変な苦労があった。それから約 10 年、マンニャン集落での識字教育開講や、奨学生としての受け入れ要請は著しいものがある。現在識字教育を行っているパクパク村周辺、アムナイ川中流域のほとんど全てのムラから識字教育の要請が上がっている（マエバ村、マカトリオ村、カマンブガン村、ランラナン村、カンルアン村、ソアカン村等）。こうした変化は協会事業の成果であると同時に、彼らの社会が急激な変化にさらされており、教育、あるいは「読み書き」が彼らの生活と文化を守るために大切なものである、との認識が定着しつつあるからである。

協会では AALPP(アムナイ川流域識字教育推進事業)を立ち上げ、5 年内にはアムナイ川流域全 5 村で識字教育を開講する予定である。この方針に基づいて、今期はパクパク村の他にカマンブガン村、カンルアン村、ランラナン村、ソアカン村を定期的に訪問、住民との間でのさまざまなコンセンサスを作りながら緊密な信頼関係を築くことができた。

各事業

1. 1 就学支援事業

1 - 1 就学支援事業

奨学生状況（（）内はドロップ・アウト生数）

| | 小学校 | ハイスクール | 大学及び専門学校 | 計 |
|-------|-----|--------|----------|-------|
| アラガン族 | 6 | 4(2) | 1 | 11(2) |
| イラヤ族 | 1 | 11 | 4 | 16 |
| 計 | 7 | 15(2) | 5 | 27(2) |

2004年3月末、小学生5名、ハイスクール2名、専門学校生1名、計8名の卒業式が連日とり行われた。近年にない多数の卒業生を出し、関係者一同喜びに堪えない反面、若干2名とはいえ落伍者を出したことは悔やまれる。サンタクルスは小さな町とはいえ、子どもたちを取り囲む環境は決していいとはいえない。町の住民のほとんどは貧困層であり、ハイスクールすら卒業できず、また定職にも就けない若者が多く、薬物依存などの問題が絶えない。こうした環境の中、タガログ人の生徒や社会にうまくなじめず、また、学校をはじめとする日常生活の中で受ける差別や偏見の目による精神的負担は大きく、こうしたことの積み重ねが落伍の原因となる。精神的ケアのさらなる充実を図りたい。

1 - 2 識字教育事業

前述したように、近年ますます高まる援助要請を基に、AALPP(アムナイ川流域識字教育推進事業)を企画、アムナイ川流域、現識字教育開講地であるパクパク村周辺のカマンブガン村、ランラナン村、カンルアン村、ソアカン村を定期的に訪問、近年内に識字教育を開講する旨コンセンサスを得た。ソアカン村やカマンブガン村ではすでに村人との話し合いの場として「スタッフ小屋」が住民の意志で建てられ、また、ランラナン村では2004年、2月以降不定期ではあるが、識字教室を開講している。

2.2 マンニャン村コミュニティ開発事業

2-1 農業指導

協会事業は、総合農村開発であり、これまでも教育（識字教育）を中心にしながら、「食の安全」あるいは「飢えからの解放」を目指して農業指導、ムラ作り（コミュニティ・オーガナイズング）を行ってきた。AALPP（アムナイ川流域識字教育推進事業）は識字教育に力点を置いた事業であるが、本来総合農村開発の一環として実施されるものであり、今季はそのための各種調査を行った。

事業予定集落の現状

| | 世帯数(9月) | 世帯数(3月) | 人口(3月) | 識字率 | カラバオ所有数 | 耕作面積 |
|--------|---------|---------|--------|--------|---------|---------|
| パクパク | 7 | 15 | 67 | 37.30% | 5 | 8ha |
| カンルアン | 32 | 28 | 97 | 0.00% | 6 | 10～15ha |
| ソアカン | 6 | 15 | 56 | 0.00% | 0 | 7ha |
| ランラナン | 45 | 29 | 101 | 1.00% | 0 | 10ha |
| カマンブガン | 36 | 28 | 98 | 2.00% | 0 | 7～10ha |

世帯数（9月）は2003年9月調査、世帯数（3月）及び人口（3月）は2004年3月の調査結果。

上の表に明らかなように、新事業地3村（ソアカン、ランラナン、カマンブガン）では耕作手段としてのカラバオを所有しておらず、タガログ人などからカラバオあるいは耕耘機を高利で賃貸することにより細々と耕作している状態である。農業技術も著しく低く、従って収穫があっても借金を返済するとほとんど手元に残らない。今後開発を進める上でカラバオなどの農業資本財の有る程度の投与は必然と思われる。

パクパク村及びカンルアン村

パクパク村は、昨年度不法伐採業者の発砲による事件以来、住民がなかなか村に戻りたがらず、村存続の危機が続いた。しかし協会の説得、また周辺集落との協議を繰り返す中徐々に住民が戻り、3月現在15世帯、人口は増える傾向にある。そもそもアムナイ川の水を簡単に引き込める地の利をもっており、村に移住したいとする潜在的希望者も多く、人口が増えれば自ずと「安全」が確立され、開発は進むはずである。米の収量は事実、人不足にもかかわらず着実に増えている。

一方カンルアン村では、前期に引き続き稲作作りを中心に指導を行ってきた。全体

として農業技術に向上は見られるものの、水路作りなどの共同作業に不慣れで各作業タイミングも常に遅れがちである。この村は人里離れた山奥であり、パクパク村などと比べるとマンニャン族文化が色濃く、従って「山」の生活に未だに依存する傾向が強い。「山の幸」は年々確実に減少しているとはいえ、「山(狩猟、採取)」への依存が農業技術習得の停滞と関係していると思われる。

ソアカン村

カンルアンの隣村にあたるソアカン村は、今年始めて出来た新しい村である。協会に代表者が農業指導や識字教育の援助支援陳情に来た6月当初は、わずか5世帯であったが、その後15世帯にまで増加、今後も増える勢いである。村の住民は耕作地を持たない周辺村出身であり、農業への意欲も著しく大きい。先の1月には村で2回目の稲作準備がはじめられ、村人の強い要望に従って、カンルアンやパクパク村のカラバオを融通、約2haの水田は現在順調に育っている。

2-2 衛生環境整備事業

事業地の拡大に伴って、協会事務所を訪問するマンニャンの人々は激増した。特に医療援助を求めて来る重患者数が増えている。中でも結核は深刻であり、事務所に到着した時にはすでに時期遅く、間もなく死亡するケースもしばしばであった。結核は半年以上の長期治療が必要であり、モニタリング、栄養改善も含めコストも人的労力も甚大である。政府が進める結核対策事業とタイアップして、なるべく効率的に対策がこじられるよう過去一年努力を重ねた。3月末現在10名の結核患者のケアを行っているが内、7名は政府の無料薬を得ている。言うまでもなく、健康や衛生環境の改善は、マンニャン族社会にとって深刻な問題であり、協会としても包括的な取り組みを行わなければならない。

3.3 マンニャン人間開発センター

3-1 センターの建設

現在協会の抱える問題の一つに、各種サービスをよりスムーズに提供するための「ハード」の充実が上げられる。上述のように、協会に事業地は拡大しており、日々の訪問者の数はますます大きくなっている。町の病院施設を訪れるために一時的に立ち寄る病人の宿泊だけでもパンク状態、各種職業訓練を行う十分なスペースもない状態である。センター建設は今期必至の事業であったが、先送る結果となった。資金繰りを深刻に考えたい。

3 - 2 職業訓練

合鴨農法の研究、女子を対象にした洋裁、製菓作りが今期の主な成果であることは先に述べた。その他の訓練については以下の通り。

| 訓練 | 内容/成果 | 訓練生 |
|-------------|--|--|
| 漁船操業 | 昨年度に引き続いて、継続的に漁船操業を行った。特に今期は、パラワン沖まで3泊、4泊ででかける本格的なものが中心となった。経常収支はもう一つであったが、奨学生の毎日の食材として貢献した。 | Alvin Miranda Greg Kasison |
| 鍛冶/溶接 | 昨年度のプログラム終了以後、特に継続的な訓練は行っていないが、事業地の住民の依頼を受け、鋤きやまぐわ等を修理した。 | Pedro Rinangyan Larry Viguilla |
| 水稲 | 協会の実験水田約 0.7ha での水稲作は完全な無農薬、有機のみによるものである。年二回の収穫は平均3トンには少し及ばなかったが、まずまずの出来である。今期で水稲作りも5年を経、訓練生が事業地のマンニャン集落に出張指導することができるようになった。 | Wilfredo Bernardo Carlos Bernardo Peter Riangyan Joefrey Rinangyan |
| パーマ・カルチャー農場 | 約 2ha の実験農場では現在淡水魚の養殖、水禽（アヒル等）鶏、ブタの飼育、各種野菜の栽培が行われている。収穫物は、先の水田で作られた米共に協会奨学生の毎日の食料として届けられた。農場は豆科植物や果樹の種苗園も兼ねており、今後の各コンポーネントの配置（設計）が課題である。 | Wilfredo Bernardo Carlos Bernardo Peter Riangyan Joefrey Rinangyan Pedro Rinangyan |

訓練生一覧（通年）

| | |
|----|----|
| 男子 | 女子 |
|----|----|

| | |
|--------------------|---------------------|
| Wilfredo Bernardo | Arlene Bernardo |
| Alvin Miranda | Prescilla Rinangyan |
| Pedro Rinangyan | Carmen Bernardo |
| Larry Viguilla | Emily Rinangyan |
| Carlos Bernardo | Josie Kasison |
| Peter Rinangyan | Raquel Miranda |
| Joeffrey Rinangyan | Richelle Pacifico |
| Greg Kasison | |